

かすが



臨時号

すべての子どもが 仲間とともに いきいきと学べる 春日小学校

学校教育自己診断アンケートの結果・分析

「成果」は、さらに伸ばしていきたい子どもたちの「強み」として、「課題」は、今後の「伸びしろ」として捉えて次年度につないでいきます。

【1・2年生】

1. アンケート結果から見える「成果」

(1)高い学校生活への満足度

「学校へ行くのが楽しい」という回答が9割前後(1年:92.2%、2年:88.8%)に達しており、**学校が子どもにとって魅力的な場所となっています**。



(2)自己や他者を大切にする心の育ち

「自分や友だちを大切にしている」という項目は両学年とも96%以上と非常に高く、**互いを尊重する人間関係**が強く築かれていると捉えています。

(3)学級における安心感の醸成

「クラスは自分も友だちも大切にでき、安心できるところだ」と感じている子が9割前後(1年:94.4%、2年:88.8%)おり、**心理的安全性が確保**されています。

(4)協働的な学びへの意欲

「みんなで力を合わせて勉強したりすることが楽しい」という回答が9割を超えており(1年:92.2%、2年:91.2%)、**集団で学ぶことへの肯定感**が非常に高いです。

(5)学習目的(めあて)の明確化

何を「めあて」にして勉強しているかを理解している子どもが8割後半(1年:87.7%、2年:85.6%)に達しており、**見通しを持った学習**が進められていると考えられます。

【成果】をさらに伸ばしていくために…

*「**安心感**」を学びのエンジンにする

「自分も友だちも大切にされている」という高い安心感を基盤に、**より難易度の高い課題や、正解のない問い合わせに対しても失敗を恐れずチャレンジできる環境**を整えていきます！

*「**めあて**」の質の向上

単に「何をするか」という活動の理解に留まらず、**その学習が「自分や社会にどうつながるか」という意味**としての「めあて」を意識することで、高い学習意欲を持続させていきます！

2. アンケート結果から見える「課題」

(1)2年生における相談・質問へのためらい

困った時に先生にすぐ質問・相談できる割合が、1年生(84.5%)に比べ、2年生では69.6%と低下しています。

(2) タイピングスキルの不足

タブレットのキーボード入力ができると感じている子は、約5割(1年:50%、2年:53.6%)に留まっており、**ICT活用の技能面**に課題があります。

(3) 家庭学習時間の確保

平日に1時間以上勉強している割合は、両学年とも27%程度と低く、**家庭での学習習慣の定着が不十分**だと捉えています。

(4) 低学年における対話的な学びの頻度

授業でペアやグループで話したり考えたりする場面があると感じている子は、1年生で40%、2年生で52%と、他の項目に比べて低くなっています。

(5) 周囲からの承認実感の低下

「周りの人から大切にされている」という実感が、2年生(72.8%)が1年生(86.7%)より約14ポイント低下しています。

「課題」を解決するために…

*「SOSの発信」をスキルとして教える

相談しにくくなる傾向に対し、「わからない」「助けて」と言えることは大切な能力(ヘルプシーキング)であることを、授業や学級活動等を通じて意識的に肯定し、教職員からの「こまめな声かけ」や「話しかけやすい雰囲気づくり」をこれまで以上に強化していきます。

*ICTスキルの系統的な指導

「タブレットを使うとわかりやすい」という高い肯定感を活かし、遊び感覚で取り組めるタイピング練習を日常的に取り入れるなど、文房具として使いこなすための基礎技能を早期に習得させていきます。

*対話の「型」と「機会」の提供

ペアやグループでの学習を「特別なこと」ではなく「日常の風景」にするため、短時間で意見を交換するなど、自分の考えが他者に受け入れられる喜び等をより多く経験させていきます。

*学校と家庭の連携強化

子ども自身は「予習・復習をしている」という実感がある一方、学習時間が短いという実態があります。宿題を「学校の勉強とのつながり」としてより意識させつつ、短時間でも集中して机に向かう習慣を家庭と協力して育成していきます。

【3・4年生】

1. アンケート結果から見える「成果」

(1) 他者貢献への高い意識



「人の役に立つことは大切だと思う」という回答が約95%(3年:94.8%、4年:95.1%)に達しており、**社会性や道徳観が高く育っている**と捉えています。

(2) 対話的な学びの日常化

「授業中、ペアやグループで話し合う活動を行っている」という項目が9割を超えており(3年:91%、4年:91.9%)、**実際に話し合うことで「内容がわかりやすい」と感じている**児童も8割以上います。

(3) 多様性への理解

「仲間や友だちとの『ちがい』をわかっている」が8割後半から9割(3年:87.9%、4年:92.5%)に達しており、**互いの個性を認め合う基盤**ができます。

(4)教員への信頼感

「先生は自分たちの意見や考えを大切にしてくれる」という回答が約9割(3年:88.5%、4年:90.1%)あり、**学習面での相談のしやすさ(87~88%)**も維持されています。

(5)安心できる学級づくり

「学級は、自分も友だちも大切にでき、安心できる場所である」という認識が8割を超えており、(3年:84.6%、4年:89.4%)、**心理的安全性が確保**されています。

「成果」をさらに伸ばしていくために…

*「ちがい」を活かした質の高い**対話**

「友達とのちがいをわかっている」という成果を、単なる理解で終わらせず、「ちがう意見があるからこそ、より良い考えが生まれる」という協働的な学びの質に転換させます。自分の考え方を広げる手段として対話を利用する意識を高めます。

*「人の役に立つ喜び」を学校運営に反映

高い貢献意欲を活かし、委員会活動や学級内での役割分担を通じて、「自分の行動が誰かを笑顔にした」という具体的な**成功体験を積み重ねさせ、自己有用感を高めます。**

2. アンケート結果から見える「課題」

(1)家庭学習時間の圧倒的な不足

1日1時間以上学習している割合が極めて低く、特に4年生では9.9%と1割を切っています(3年:14.1%)。

(2)情緒面での相談へのためらい

学習の質問には積極的ですが、「**困りごとや不安があるときに大人に相談できる**」という回答は、他の項目に比べ低くなっています(3年:68.6%、4年:73.9%)。

(3)自己肯定感の伸び悩み

「自分には、良いところがあると思う」と答えた割合が7割前半(3年:71.8%、4年:73.3%)に留まっており、**他者のよさを認める割合(86~90%)**に比べて低くなっています。

(4)読書習慣の低下

図書館で本を借りて読んでいる割合は約6割(3年:60.7%、4年:63.3%)であり、低学年(1・2年)の85%超に比べて大きく減少しています。

(5)予習・復習の未定着:*

予習(3年:50%、4年:45.3%)や復習(3年:50%、4年:48.5%)といった、**授業と連動した自発的な学習習慣**が半数程度に留まっています。

「課題」を解決するために…

*「心の相談」のハードルを下げる

相談内容を「勉強」以外にも広げるため、定期的な教育相談や「心のアンケート」を継続とともに、「悩むことは成長の証」というメッセージを伝えるなど、大人を頼るスキル(受援力)を育成します。

*家庭学習の「質」と「動機付け」の改善

学習時間の少なさを改善するため、単なるドリル学習だけでなく、**授業で興味を持ったことをタブレットで深掘りするなどの「自学(自主学習)」等にも取り組ませていきます。**特に、「宿題が明日の授業にどうつながるか」という接続性を強調し、家庭学習の意義を実感させます。

*自己肯定感の向上(リフレーミング)

「自分には良いところがある」という意識を高めるため、他者の「よさ」を見つける活動(項目15)と連動させ、「友達から見た自分のよさ」をフィードバックし合う機会を意図的に設けるなど、仲間・集団づくりの取組を通して、一人ひとりの自己肯定感を高めていきます。

*読書環境の再整備

中学年(3・4年)の興味に合った図書の紹介や、授業と関連したブックトークを行うなど、「本を読むことの楽しさや有用性」を再発見させる取組を進めています。

【5・6年生】

1. アンケート結果から見える「成果」

(1)協働・対話の充実

授業中、ペアやグループで話し合う活動(6年生:97.5%)や、みんなで協力して活動することへの楽しさが高く、集団での学びが定着しています。



(2)他者信頼と心理的安全性:

「困ったときに友達に『教えて』『助けて』と頼れる」割合が6年生で94%に達するなど、安心して学べる人間関係が構築されています。

(3)高い他者尊重と貢献意識

「人の役に立つことが大切」という意識や、友達のよさを知っている割合が高く、道徳性が豊かに育っていると考えられます。



(4)教員との信頼関係

「先生が自分たちの考えを大切にしてくれる」と感じる子が9割を超え、困ったときにも相談できる環境があるという安心感があると捉えています。

(5)学校生活への高い満足度

「学校へ行くのが楽しい」という回答が9割を超え(5年:90.9%、6年:94.5%)、次のステージに向けて意欲的な姿勢が見られます。

「成果」をさらに伸ばしていくために…

*「対話」を「解決」の手段へ高める

「話し合うとわかりやすい」という実感を基盤に、単なる意見交換で終わらせず、互いのよさを生かして解決方法を決定する場面(項目9)を増やすなど、より高度な合意形成能力を育みます。

*「受援力(頼る力)」を自立の土台に

「友達に頼れる」という強みを活かし、高学年ならではの難しい課題(探究的な学び等)に挑戦させるなど、「個人の限界をチームで超える」成功体験等をさらに積ませていきたいと考えます。

2. アンケート結果から見える「課題」

(1)家庭学習時間の著しい不足

平日に1時間以上勉強している割合は5・6年生ともにわずか12%です。中学・高校への接続を見据えた学習習慣の確立をしていきたいと考えます。

(2)読書習慣の減退

図書館で本を借りて読んでいる割合は3割台(5年:39.1%、6年:35%)に留まり、低学年や中学生と比較し、最も低い数値となっています。

(3)自発的な予習・復習の低迷

家の予習や復習の実施率が低く、**授業外での自立的な学び**が課題です。

(4)自己決定によるICT活用

タブレットを自分の判断で有効活用できていると感じる割合は、5年生で 62.6%、6年生で 78%であり、さらなる**「文房具化」**の余地があります。

(5)自己肯定感の相対的な低さ

他者のよさを認める割合(94.5%)に対し、「自分に良いところがある」と答えた割合(5年: 72.2%、6年:82%)は低く、**自分への自信を深める支援や取組**が必要だと考えます。

「課題」を解決するために…

*「学校での学び」と「家庭での探究」の再接続

宿題を「やらされるもの」から、授業とつながる「知りたいことを深める時間」(自立的な学び、主体的あ学び)へ転換します。6年生の 91%が「宿題は授業とつながっている」と感じている点を活かし、タブレット等を使った自主学習(項目 31)の質を高めていきます。

*「自己肯定感」を「他者からの評価」で補強する

「友達のよさを知っている」児童が多いことを利用し、日常的に「あなたのここが素敵だ」と互いに伝え合う活動等も設定します。他者からの承認を通じて、自分の良さに気づかせるアプローチを強化するなど、学校全体の取組として進めています。

*「読書の目的」の再定義

娯楽としての読書だけでなく、自分の将来の夢(項目11:8割以上の児童が保持)や、社会をよくするための考え(項目35)を深めるための「調べる読書」や「目的を持った読書」を授業に組み込み、学校図書館の利用を促進します。

*「家庭との連携による「生活リズム」の構築

学習時間の不足は、放課後の過ごし方全体に関わります。保護者に対し、今後を見据えた家庭学習の意義を共有するとともに、短時間でも集中して机に向かう環境づくりを呼びかけていきます。



これからも、子どもたちの成長を1年単位ではなく、「1年から6年まで」「小1から中3まで」と系統的に捉え、育んでまいります。また、東香里中学校区にある4小学校との「小小連携」と、東香里中学校との「小中連携」、そして、就学前施設との連携をさらに深め、子ども一人ひとりの成長を大切に、教職員が一丸となって取り組んでまいります。

そのためにも、今後さらに保護者や地域の皆様との連携、相互理解を深め、大人同士の**対話**も大切にしながら、子どもたちのために「できること」を考え、実行していきたいと考えています。そこで、「読み書き計算」等の知識や技能を身に付けるための学習内容だけでなく、子どもたちの10年後、20年後を見据えて**「子どもにつけたい力」**について、保護者の皆様のお考えをアンケート形式で伺います。また、子どもたちにも、「大人になるに向けて、自分がつけたい力」について問う予定です。自分自身の成長のために何が必要なのかを子ども自身が「自分事」として捉えて、学校生活や自分の学びを主体的に進めていくよう、子どもや保護者の皆様の声もふまえた取組を推進してまいります。

いつもピカピカで、「ありがとう！」が学校中にあふれる春日小学校